

北海道支部

「北海道の建築展2022」

テーマ：受け継がれて進む地域性を見つめて

北海道支部長
小西彦仁

多くの方が来場したこれまでの北海道建築展

北海道支部は、支部設立35周年を記念して9月23日から建築展を開催します。北海道支部では支部発足以降、今回を含め3回美術館での建築展を開催しており、1回目および2回目は北海道近代美術館で、3回目の今回は札幌芸術の森美術館で開催することになりました。

ここで過去の建築展から時系列に紹介します。

1回目は32年前(上遠野徹支部長)、JIA設立の3年後の1990年2月21日から25日まで開催され、テーマは「北の建築家たち—空間への浪漫展」でした。

展示内容は、1.都市の浪漫「ネオ北海道への予兆」、室蘭、旭川、函館、紋別、札幌。2.歴史への浪漫「フロンティアの魅力」、道庁、ヒンデル、田上義也。3.異郷への浪漫、スウェーデンの建築家の空間(5名)。4.自然への浪漫「支部会員全作品展示」。5.創造への浪漫、市民、児童参加による建築空間体験。以上、5つのテーマの展示でした。

付属行事の講演は、「北海道と私」清家清(札幌市立高専(現大学)初代学長)、「家具と建築」長原実(カンディハウス創業者)、「彫刻と建築」国松明日香(彫刻家)、スウェーデンから来札の建築家カール・ニーレンが「私の建築空間」と題し話されました。

その他エクスカーションとして、白井晟一設計の北海道唯一の作品「ルスツ山寮」の見学が行われました。5日間の来場者は4,200名と記録されていて、北海道民の建築文化への興味がうかがえます。

2回目は14年前(圓山彬雄支部長)の2008年2月1日から10日までで、同じく北海道近代美術館で開催されました。テーマは「ココでくらす。ココロでくらす。」で、支部設立20周年記念行事として開催されました。展示内容は、「であう」：北海道の建築家の素顔や趣味などを

紹介。「ねづく」：寒冷地においての建築家のさまざまな挑戦と試み、上遠野邸(JIA 25年賞)を中心に紹介。「かんじる」：地球温暖化、原油高騰、高齢化など建築にできることを紹介。「よみがえる」：古い建築を活かした再生例を紹介。「ささえる」：建築がどのような技術によってつくり上げられているかを紹介。「くらす」：建築家がつくる住宅を紹介し、模型で街並みをつくり展示しました。

付属事業の講演は、「うつろいの空間」坂本昭(建築家)、「金色の塵」齋藤裕(建築家・小樽出身)、「上遠野徹の建築」上遠野徹(元北海道支部長)・角幸博(北海道大学)、「北海道赤レンガ建築賞の20年」越野武(北海道大学名誉教授)、「アイスドームの構造と空間」粉川牧(東海大学)、「産業・まちなか遺産を活かす人とココロ」水野一郎(北陸支部)、「自然素材を生かした藤森流建築の作り方」藤森照信(東京大学)。その他4つのワークショップも行われました。来場者は5,038名で、短期間ですが相変わらず建築展の人気の高いことがわかります。

14年ぶりに建築展を開催

そして今回は14年ぶり3回目の建築展となり、9月23日から10月10日まで札幌芸術の森美術館で開催します。北海道の建築展2022のテーマは「受け継がれて進む地域性を見つめて」。第1部は北海道の建築の歴史・技術・工法・意匠を通し、過去から未来へとつながる建築の流れを紹介し、第2部では北海道の風景の中で、建築家がどのようにそれを解き建築を創りあげているか、実作を通し紹介します。第1部のキュレーションおよび全体の監修はジャーナリストの磯達雄氏に依頼しました。第2部のコーディネートは景観研究者で北海道在住の植田暁氏に行っていただきます。



「北の建築家たち—空間への浪漫展」(1990年)



「ココでくらす。ココロでくらす。」(2008年)



前2回とは違う視点で北海道の建築を見ていただけるように、磯氏、植田氏、そして我々建築展実行委員会のメンバーが鋭意準備を進めています。気持ちの良い秋の北海道に、皆様のご来場を心よりお待ちしております。

*本展に先立ち、9月16日から18日までの間、告知展をチ・カ・ホ「札幌駅前通地下広場」にて開催いたします。

こちらもぜひご覧ください。

「北海道の建築展 2022」

期間 2022年9月23日(金) — 10月10日(月)

会場 札幌芸術の森美術館

主催 公益社団法人 日本建築家協会 北海道支部



詳細はHPをご覧ください。

<https://www.jia-hok.org/hokkaido2022/index.html>

批判的地域主義の建築

北海道という土地では、長い歴史においてさまざまな建築が建てられてきた。それはまず、大地と結びついて暮らすアイヌの住居であり、和人によって築かれた開拓地の建物であった。明治維新後には次々と新しい都市が開かれ、それは日本の近代化の先駆けともなった。冬季は厳しい寒冷の地であり、これに対応した建築の技術も研究された。その中でコンクリートブロックや板金といった材料が見出され、広まることにもなった。

世界的な建築デザインの流れを見ると、機能主義のモダニズムが台頭する20世紀以降、あるいは新古典主義の様式が各国で取り入れられる19世紀からといってもいいが、共通性を志向するグローバリズムが席卷している。北海道の建築も大勢としてその流れにあるが、一方でこの地域ならではの建築のあり方もしっかりと探られた。それは建築のグローバリズムに抵抗する志向である。そうして試みられる建築は、地域のルーツ的なスタイルを遡ろうとするものだけではない。時代ごとに新たな地域性を発見しようともしてきた。

こうした態度を、建築評論家のケネス・フランプトン
は、批判的地域主義（クリティカル・リージョナリズム）
と呼び、メキシコのルイス・バラガンやポルトガルのアル
ヴァロ・シザらの作品をその例に挙げている。北海道
の建築において根底にあるのが、この批判的地域主義な

のではない。もちろん、どの地域においてもそうした態度は可能であろうが、日本国内でもその流れがはっきりと見て取れるのが、沖縄と並んで北海道なのである。

そうした視点から、この展覧会では北海道の建築を特徴づける作品を選び出し、それらをつなげて見ることによって、近現代の北海道建築史を概括できるよう試みる。展示においては、北海道の地域性と結びついた建築の代表作を、「〈人間が住む大地〉の風景」「近代都市の発展と復興」「冬でも楽しい北の暮らし」「地域と結びついた素材」「新たなデザイン潮流を開く」という5つのサブテーマに分けて、それぞれに紹介する。併せてこの地域の建築づくりをリードしてきた北海道の主要建築家についても位置付けを行う。

北海道の建築は、以前からたいへんに興味深い対象として映っていた。しかし北海道は、自分にとって出身地でもなければ継続して暮らした場所でもない。それゆえ、北海道の建築をテーマにした展覧会の企画をJIAの北海道支部から依頼された際にはためらいがあった。しかし、「地域の外からの視点がほしい」と説明され、それならばということで引き受けさせていただいた。私なりの「批判的」なスタンスが伝われば、本望である。

磯 達雄 (建築ジャーナリスト)